

氏 名	お 愛 岩 元
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 244 号
学位授与の日付	平 成 5 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	「唐代地域史研究」

論文調査委員 (主 査) 教授 竺沙雅章 教授 永田英正 教授 間野英二

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、唐代の諸地域における都市と村落の実態について個別の検討を積み重ね、それに基づいて、唐代社会の時代的变化をさぐることを目的としたもので、華北篇7章、華中篇3章から成る。

華北篇第一章「唐代兩京郷里村考」は、唐代の首都長安と東都洛陽との郊区における郷里制の施行状況及びその自然村落との関係を、主として墓誌に記載する葬地の地名を史料にして検証する。その結果、百戸を一里、五里を一郷とする郷里制は、少なくとも制度上はあらゆる農村地区を實に見事に組織化していること、その組織化によって、自然村落が制度上では2郷ないしは3郷に分割される場合もあったことを明らかにしている。

第二章「唐代京兆府の戸口推移」は、唐代の首都圏である京兆府の戸口動態をさぐったものである。すなわち、新出の敦煌文献「敦博地誌残卷」に記された郷数に基づいて、唐代盛時の府下各県の戸口数を推定し、既存史料による元和期以降の戸口数と比較することによって、各県の戸口増減の状況を明らかにする。論者はさらに戸口増減の背景をさぐり、戸口数が増加するのは、帝陵が集中して存在したり行宮的性格の強い県であり、逆に減少するのは、王公貴族による碾磑設置が集中している県であるとする。つまり、王公貴族が碾磑のために上流で不法に取水するので、流域農田に多大の損失を与え、郷数の減少、戸口数の激減をもたらしたと推論する。しかもこうした農田水利上の原因による戸口の減少は、この地域のための減少ではなく、本来雨水の少ない華北農業地帯に共通するものであると指摘している。

第三章「五代・宋初における長安とその周辺」は、万年県に建てられた「広慈禅院莊地碑」に記載する地段的分析をし通して、五代宋初の長安とその近郊の状況を明らかにする。唐末の戦乱で廢墟と化した長安城は、五代に規模を縮小して再建されたが、旧城内のほとんどの地が城外郊区となり、農田化された。その結果、旧城の東壁や興慶宮の宮牆が土地の境界として利用されていること、本碑にみえる莊園が細分化された地段的集積という近代的性格を呈していること、さらに渠水からの取水口である斗門を有力者が占有し、彼らが水利権をほぼ独占していたことなどを実証する。

第四章「唐代関内道の城郭規模と構造」は、長安を中心とした関内道地域の州県城郭の構造とその背景

について考察する。この地域の諸城郭の築造時期、城郭規模、立地条況等を比較検討してみると、主として長安の西面及び西北面に位置する州県城では、唐後半期以降に修築や増修が顕著に認められることに、著者は注目する。そしてそのことは、吐蕃や回紇など、西北及び北方に新たに興起した諸民族の攻勢に対する防衛体制を構築する必要からであったと解釈する。さらにこの地域が五代以後、再び政治の中枢となることがなかったのも、財政的な比重の低下だけではなく、唐代後半以降におけるこの地の辺境化という背景が存したとの新見解を提示している。

第五章「唐代太原城の規模と構造」は、唐代において長安、洛陽につぐ華北の重要都市とみなされた太原城の城郭構造の復元を試みたものである。唐代の太原府城は従来、その城周が27里と信じられてきたが、『永樂大典』所引の古地志の記述によって、その城郭は周り40里乃至42里という大規模なものであったことを実証する。さらに主部の西城に加えて、汾水をはさんで東城が作られ、ついで東西両城をつなぐ中城が築かれ、全体で三城構造という特異な形態であったことを、初めて明らかにする。しかもそれらは、唐初以来の北方民族の南侵に対処するため、防衛強化策として順次増築されたものであり、軍事要塞色の濃い城郭構造であった点が、この都市の第一の特徴であると結論する。

第六章「唐代の蒲州河中府城と河陽三城」は、同じく三城構造からなる、黄河にまたがる河中府城と河陽県城とを取り上げて、それぞれの城郭構造とその特徴とを詳述する。著者によれば、両城が三城からなる点では、前章の太原城と類似するが、巨大な中州上に中潭城があり、黄河の兩岸にそれぞれ城郭をもつ三城構造である点では、大いに異なるという。しかも、ともに中洲と兩岸の間に架けられた二本の浮橋を伴っており、交通運輸上、軍事上に重要なこれらの浮橋を防禦するために、三城一体の強固な城郭構造がつけられたとする。さらに後者については、魏晋以来の築城と架橋の経緯、三城及び浮橋をめぐる展開された攻防の跡をたどって、ここが運輸上、軍事上いかに重要な場所であったかを示す。また入宋僧成尋の旅行記によって、宋代の浮橋の様子を述べ、さらにいわゆる黄河三浮橋の管理方式に言及するなど、本章はとくに周到を極めた論考である。

第七章「唐代前半期の華北村落の一類型」は、大きな社会変動を受けていない唐代前半期の自然村落の具体像を明らかにするため、河南修武県下の「周村」とよばれる周氏の同族村落を取り上げる。その主たる史料は、「周村十八家造象塔記」である。この碑記は、唐代戸籍に見える1戸の口数の一例として、かつて紹介されたことはあるが、唐代前半記の郷村類型を示す史料として取り上げるのはこれが初めてである。著者は、この碑陰に刻された多数の供養者名の分析を通して、同族的村落の存在を示し、その村落規模を明らかにする。またこの村落からは、ごく少数ながら地方下級官僚と折衝府の衛官を出していることから、ここは平均的な村落より上位にあり、経済的にも恵まれていたと推定する。そして、この周村は、農民の日常生活の場である自然村落の実態が具体的に判明する数少ない例であり、唐代華北の農村を考察する上で、一つのモデル・ケースとなり得ると結論する。

華中篇第一章「唐代江南における宗教的関係を媒介とした士人と地域社会」は、「潤州仁静観魏法師碑」に刻まれた数百人に及ぶ道観再建事業の関係者を分析して、唐代前半記における地域社会の実態を明らかにしたものである。著者はとくに、南北朝期に北方からこの地に移ってきた僑居士人の存在に注目し、彼らが唐初においても貴族としての身分を保持しつづけ、かなり広範な地域社会に対して指導的役割を果た

していたことを明らかにする。

第二章「唐代の揚州城とその郊区」は、唐代を代表する大規模な城郭都市である揚州城の復元とその城外郊区の変化を解明する。文献資料と考古学的調査の結果とに基づいて、先ず唐代揚州城の外郭を定め、ついで城内における官衙、橋、寺院、道観、坊市の所在を復元する。また郊区の郷、里、村を復元し、それらの名称に唐宋間で明らかな断絶がみられることを指摘する。さらに、唐代後半に極盛を迎えていた揚州城は、運河にその都市の繁栄を依存していたため、運河の淤塞、長江江岸線の南移などの地理的環境の変化によって、唐末には急速に衰退に向かったことを実証する。末尾には、詳細な「唐揚州城復元図」「唐揚州郊区復元図」を付している。

第三章「唐末五代期における城郭の大規模化」は、いわば本論文の総括部分にあたる。唐代の府州県城は、各レベルではほぼ共通の規模を有していたが、唐末五代期の華中、華南の州県城で、城周20里あるいはそれ以上の大規模なものに拡張重修され、強固な防城設備をそなえた城郭が続々登場してくることを、丹念に収集された城郭史料を通して明らかにする。さらに比較的規模や構造の分かる30州県城について一々検討を加え、これらは唐末に中小群雄の本拠として築かれ、彼らが次第に淘汰されて十国に収斂されていく過程で、十国領内の戦略拠点として改めて重修が加えられたことを実証する。華北の五代政権下では、このような事例はほとんどみられず、もっぱら華中、華南で認められる事象であるとする。最後に、城郭の存在が確認できる330余の州県城郭について、その城郭構造、城周、城高、城闊、城門の有無、築年等を記載した「唐代州県城郭一覧」を付している。

論文審査の結果の要旨

近年、わが国の中国史研究では地域史に対する関心が高く、諸地域の都市や農村について、その内部構造や変化の過程を探る研究が多くあらわれている。ただしそれらは、主に宋代以後を対象にしていて、それ以前に遡るものは少ない。そうしたなかで、本論文の著者は、唐代を中心とする地域史研究を推し進めて、数多くの業績を著わしてきた。本論文は、著者の過去十余年間の研究成果を集成としたものである。

本論文の第一の特色は、関係史料の発掘と、その運用の妙にある。唐代の地域史研究が少なかった大きな理由は、史料の不足という点にあった。著者はその欠を補うものとして、石刻資料を活用する。その第一は、近年も続々と出土している墓誌である。墓誌には、おおむね葬地の地名が行政末端組織である郷、里、村のレベルまで記載されていて、地志等では窺うことのできない地名を知ることができる。その点に注目した著者は、華北篇第一章において、首都長安と東都洛陽の郊外から出土した墓誌中の地名を収集して、その位置を地図上に比定する。そうした作業を経て、この地域で郷里制が整然と実施されていたこと、自然村落は2郷ないし3郷の分割される場合もあったことなどを、具体的に明らかにする。もとより墓誌を地名考証に用いることは珍しくない。しかし本論文のように、一地域の墓誌が網羅的に郷里制復元の史料として用いられることは稀である。この論考は、墓誌の史料価値を広げた点で、とくに注目される。第二は碑刻である。碑刻の場合も、著者独自の分析方法によって、その記録から、従来指摘されることのない新たな史実を導き出すことに成功している。同篇第三章では、五代宋初の莊園の存在形態を示す史料として重視されてきた「広慈禅院莊地碑」を取り上げ、その地段記載を分析して、唐末の長安城は、旧

城のほとんどが城外郊区となり、農田化していたことを実証している。その他、「周村十八家造象塔記」(華北篇第七章)、「潤州仁静観魏法師碑」(華中篇第一章)では、それぞれに刻まれた多数の人名を手掛かりにして、前者では周村という同族的村落の実態を、後者では仁静観を中心とした地域社会の在り方を探っている。これら石刻を史料として扱う手法は実に見事であり、その方法は今後の地域社会の考察に大いに活用されることであろう。

本論文で特に生彩を放つのは、城郭都市についての考察である。唐代の都市研究は、長安と洛陽の都城については、長年の研究蓄積があるが、地方都市になると、江南の一、二の大都市を除いては、研究されることが極めて少なく、その実態はほとんど明らかになっていない。その欠を補うべく、本論文は、関係史料を博搜して、中国各地の城郭をもつ州県城の構造とその特質、唐代から宋代への変遷などを、多角的に考察している。華北では、(1)関内道の諸都市(第四章)、(2)山西の太原府城(第五章)、(3)黄河にまたがる蒲州河中府城と河陽三城(第六章)を取り上げる。そのうち特に注目されるのは、(2)と(3)とである。(2)では、既に失われた唐代の太原府城を復元して、これが三城構造からなり、城周40里ないし42里の大規模なものであったことを明らかにし、旧来の説を訂正する。(3)の両城も同じく三城構造ではあるが、巨大な中洲上に中潭城を築き、兩岸との間に浮橋を架ける特異な構造であったことを、はじめて解明した。さらに河陽三城については、魏晉以来のこの地をめぐる攻防の跡をたどって、この城郭と浮橋とが歴史上いかに重要であったかを明らかにしており、この論考から城郭史研究の魅力と重要性が看取される。

華中では、唐代に「揚一益二」といわれた最大の商業都市揚州を取り上げる(第二章)。まず中国の考古学調査と関係文献とから、揚州城の外郭を定め、場内の官衙等の位置を比定して、「唐揚州城復元図」を作成している。この論考発表後、中国でも現地調査に基づく「唐代揚州城平面図」が発表されたが、本論文の復元図はこれとほぼ一致しており、復元の正確さが証明されることになった。ついで郊区についても復元を行い、揚州が唐末に急速に衰退した原因を、運河の淤塞と長江江岸線の南移という、地理的環境の変化に求めるのは、説得力に富む新見解である。

末章では、中国全土の州県城郭330余の規模を調べ、華中と華南の30都市の変遷をたどって、唐末五代に華中、華南では城郭の大規模化が進んだこと、その背景には唐末における中小群雄の割拠、五代での十国の軍事的対立があったことを実証する。このように、唐・五代の地方都市を包括的に論じたものは、本論文が初めてであり、唐代史に新生面を開いた研究として、高く評価されるであろう。

本論文各章の論証は極めて堅実である。しかし、細部においては、碑刻の欠字の比定、刻文の解釈などに、やや強引なところが二、三みうけられる。また敦煌写本の地志残巻を史料に用いているが、筆蹟、紙質等から書写年代を推定するという、古文書や古写本を扱う場合に、先ず踏まねばならない手続きが省かれているのは、惜まれる。さらに、本論文は全体を華北篇と華中篇とに分けているが、華中篇第三章は著者自らも記すように、本論文の総括部分、より正確に言えば、唐代城郭都市研究のまとめの部分である。こうした点からすれば、城郭都市篇と郷村篇とに分けた方が、本論文の趣旨に副うように思われる。もちろん、これは論文構成上の問題であって、内容に関わることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認める。

平成4年11月19日、調査委員3名が試験を行った結果、合格と認めた。